

## 抵抗と赦し

——『全体性と無限』における繁殖性の二元性

石井雅巳(慶應義塾大学)

エマニュエル・レヴィナスの著書である『全体性と無限』(1961)の第四部は「顔の彼方」と題され、そこでは対話による倫理的関係とは区別された、愛について、より具体的には、〈女性的なもの〉とのエロスの関係が展開されている。そこでレヴィナスは、認識や対話といった理性的な関係とは異なる、感性的な関係としての「愛撫」や、息子の誕生という「繁殖性」を中心的な論点として提示している。こうしたエロス論を巡っては、鍵概念となる〈女性的なもの〉や「繁殖性」という概念をいかなる意味合いで解釈するのかに応じて、大きく分けて二つの立場から議論されてきたと言える。一方で、エロス論における「愛される女性」という表象や生殖の帰結としての「息子(嫡男)」の誕生は、生物学的・経験的なものを含んでおり、そこに男性中心主義や家父長制を見出して批判する立場が存在する(Beauvoir 1968, Irigaray 1990)。他方で、こうしたフェミニズムの側からの批判に対して、レヴィナスの議論は、女性“的なもの”と言われるように、あくまで比喩的なないし存在論的な議論であって、経験的な親子関係や異性愛を規範にしているわけではないと見做したり、男女を入れ替えても議論は成立すると主張し、レヴィナスを擁護する立場もある(Schnell 2010, Salanskis 2011)。

とはいえ、前者の立場が述べるように、レヴィナスの議論が単なる男性中心主義や家父長制的主張であるとすれば、実際のレヴィナスの記述はあまりに思弁的である。すなわち、その批判そのものが正当だとしても、前者の議論だけでは『全体性と無限』第四部の議論全体を解釈することは出来ず、読解の指針としては不十分であると言わざるをえない。しかし、後者の立場に対しては、レヴィナスの主張の意図が経験的なものではないならば、なぜそのような語彙を用いて記述しなくてはならないのか(Chanter 2001)という根本的な指摘が今なお有効であり続けている。それゆえ、エロスの現象学に関する統一的で標準的な解釈は、未だ提出されていないと言わざるをえない。

こうした研究状況を踏まえつつ、本発表の目的は、第四部のなかでも解釈が困難とされている「繁殖性」と呼ばれる議論を取り上げ、その二元性を析出することにある。すなわち、繁殖性を一貫した観点で矛盾なく読み解くことで、その議論が経験的か否かという論争を調停するというよりは、むしろ経験的と言わざるをえない議論と、単なる経験的な記述を超えた主体の存在論と言うべき議論の二つが繁殖性のなかに混在していることを指摘し、さらにはそのそれぞれの議論の文脈や内実、意図を明確化することに努めたい。

そこで本発表では、繁殖性を、①ある種の断絶を伴いつつも、なおそこに連続性や継承を重視するモチーフと、②一定程度の連続性を含みつつも、断絶や刷新を重視するモチーフという二つの側面から読解していく。まず、①のモチーフは、「歴史批判」と呼ばれる議論において論じられる。レヴィナスにとって「歴史記述とは勝者、言い換えれば生き延びた者たちが達成する搾取に基づくもの」(Levinas 1990: 253)であり、個々の他者の特殊性を無視し、自らの都合のよい物語へと回収する全体性の暴力であるとさえ言える。レヴィナスは、こうした歴史による暴力への抵抗として、まずはその場に現前する語りによる弁明に活路を見出すが、自らが死んだ後も自分を継承して歴史に抵抗してくれ

る「私でありつつも、私ではない息子」の誕生を繁殖性の名のもとに論じている。ここでの息子はある意味で「私でもある」と論じられるなど、容易には解釈できない箇所を含むものの、歴史批判と関連する繁殖性の議論から、経験的で家父長主義的な色彩を完全に脱色させることは困難であると言わざるをえないだろう。

それに対して、②のモチーフは、他者によって私の過ちが赦されるという論脈のもと、新たな私の生成という主体性論として語られている。レヴィナスは『全体性と無限』において、私の世界に関する理解や振る舞いが他者から問い込まれることを「倫理」として語っているが、この苛烈な審問や告発によって顕となる私の過誤が赦されることで、私が新たな生を獲得する契機を繁殖性として語っている。レヴィナスによれば、赦しは、忘却のように過去そのものを消し去りはしないが、通俗的に考えられた時間の流れが逆転するような可逆性を伴っている。つまり、赦されることで、時間が逆転し、私はあたかも過ちを犯さなかったかのように存在することができる。かくして生まれ変わった新たな私を「子」と呼ぶのであれば、繁殖性は、経験的な性差や家父長主義に絡め取られることなく、レヴィナス独自の責任論と紐付いた主体性に関する議論として読解することが可能であるように思われる。

加えて、このような「赦し」に関する議論は、男性中心主義や家父長制を免れるだけでなく、自律した個人を前提にした近代の道徳哲学を批判し、「傷つきやすさ」を人間の条件と見做すケアの倫理や一部の徳倫理学とも響き合う内実をもったものとして新たに読み直しうる可能性を秘めている。

以上の読解によって、本発表は、繁殖性を、歴史への抵抗と過誤の赦しという異なる論脈の合流地点として解釈することで、一方ではフェミニズム側からの批判を受け入れつつ、他方ではそれに留まらない意義を有する議論として提示したい。また、こうした本発表の読解は、繁殖性の難解さについて、従来の研究とは異なる見解を導出することが可能となる。すなわち、多くの先行研究では、「息子」をはじめとした諸概念が経験的か否かの二者択一を巡って争われてきたが、本稿は、むしろ「子」という語が異なる文脈のなかでそれぞれ経験的に用いられている場面と比喩的にも用いられている場面を適切に切り分けることで、これまでの諸研究が苦心していた隘路を回避することができるだろう。

## 引用文献

- Beauvoir, Simone de. 1986. *Le Deuxième Sexe, t.1. Les faits et les mythes*, Gallimard.
- Chanter, Tina. 2001. "Introduction," in: Tina Chanter (ed.), *Feminist Interpretations of Emmanuel Levinas*, Penn State University Press, pp. 1-27.
- Levinas, Emmanuel. 1990. *Totalité et infini. Essai sur l'extériorité*, La Haye, M. Nijhoff, 1961, coll. « Le Livre de poche ».
- Irigaray, Luce. 1990. « Questions à Emmanuel Lévinas », *Critique*, n° 522, Minuit, pp. 911-920.
- Salanskis, Jean-Michel. 2011. « Sur des objections à Levinas », in: *L'humanité de l'homme: Levinas vivant II*, Klincksieck, pp. 101-123.
- Schnell, Alexander. 2010. *En face de l'extériorité: Levinas et la question de la subjectivité*, J. Vrin.